

児童の道德性の発達について

—その特性及び親の養育との関連の検討—

粕井みづほ・岡本欣子・中村裕美子・小西勝一郎

The Moral Development in Children

—It's Characteristic and Relation with Parental Discipline—

MIZUHO KASUI, NORIKO OKAMOTO, YUMIKO NAKAMURA, AND KATSUICHIRO KONISHI

問 題

近年、非行青少年問題の深刻化に伴ない、児童の道德性に対する関心は著しく高まってきたが、現在なお、道德性の科学的な理解と体系的な研究の余地が少なくないように思われる。

道德性の発達に関するこれまでの研究は、主に、道德判断・行動・感情の三つの側面からのアプローチがなされている。すなわち、道德判断は、主に認知理論の立場から研究されており、Piaget¹⁾やKohlberg²⁾の研究は代表的である。Piagetの二段階説、Kohlbergの六段階説は数多くの研究により実証されている。その中でも、Damon³⁾やSelman⁴⁾のように、Kohlbergの例話などは子どもには親しみがうすいという批判から、独自に研究を始める動きもでてきている。第二に、道德行動は社会学習理論の立場から主に研究されているが、行動が道德的か非道德的かの基準は文化的要因との関わりが大きく、道德行動の発達の傾向についてもまとまった実証的研究はほとんどない。第三に、道德感情は精神分析理論の立場から研究されているが、指標とする罪悪感や良心の測定は困難なものであり、研究も他の二面に比べて少ない。

以上の道德性の研究と並行して、その内面化を促すものについての研究も行われてきている。その対象は幅広いが、中心は両親の養育についてであり、基本的な親子関係の問題・具体的なしつけやテクニックの問題・同一視の問題の三点から問題にされているようである。この親の養育態度と道德性との関連についての研究はHoffmanやSaltstein⁵⁾をはじめ、多くの研究者により行われているが、Shaffer⁶⁾によると、理論的な仮説を十分に実証し得るだけの資料はなお乏しいという。また、我が国においても倉貫⁷⁾や久世⁷⁾の研究の他には、実証的な研究

はほとんどみあたらない。なお、子どもの道德性の発達に父親が重要な役割を果たすことは、Greif⁸⁾やLynn⁹⁾をはじめとして多くの研究者が一致して唱えている所であるが、道德性と親の養育との関連について問題にする場合には、母親を対象とすることが多く、父親についての研究は比較的少ない。

道德性研究のこのような現状において、我々も、まず児童の特性を発達的に明らかにすることを目的として、いくつかの危機的場面を質問紙によって、道德感情・行動・判断の三側面より検討した。また、あわせて、児童の道德性と親（父・母）の養育との関係についても吟味を行い、道德性発達への親のあり方を探ろうとした。

調 査 方 法

1. 調査対象

表1に示すように、幼稚園児から中学生までの児童266名と、その父親・母親を対象とした。

対象となった幼稚園は、堺市泉北ニュータウン内にある私立幼稚園であり、新興住宅地にあると言える。また、小学校は守口市内にあり、近くには国道が走り、工場等も多い所である。中学校は大阪市大淀区にあり、住宅と商店とが混合する地域である。以上のように、調査対象は地域的に異なっており、結果の考察にあたり、このことは十分に考慮せねばならない。

表1. 調査の対象

	幼年長	小2	小3	小5	小6	中2	中3	合計
男子	24	20	18	20	17	21	19	139
女子	17	21	16	18	19	17	19	127
合計	41	41	34	38	36	38	38	266

II. 調査手続

次の二種の調査から成る質問によって調査を実施した。

1. 道徳性に関する調査

子どもの日常生活の中で経験すると考えられる道徳性を踏まえた葛藤状況のうち、代表的な5つの例話について調査を行った。

例話1. 権威と従順

春子さんのお母さんは、いつも春子さんに、部屋の片づけをしてほしいと思っていました。だからお母さんは、「片づけをするまであそびに行ってはいけませんよ。」とよく言いました。でもある日、春子さんの友だちが「あそびに行こうよ。」と誘いにきました。「今すぐ来ないと仲間に入れてあげないよ。」とその子は言いました。春子さんは行きたかったのですが、部屋の片づけをすましていませんし、お母さんは、「片づけをすませるまでは、行ってはいけませんよ。」と言います。

例話2. 正義（公平）

仲のいい友だち3人で、大好きなおばさんにプレゼントを作ることにしました。ひとりは、一生けんめいに作りましたが、別のひとりは、なまけていました。あともうひとりは、一生けんめいにやったのですが、ほかの2人よりも年下だったので、あまりじょうずにできませんでした。お婆さんは、プレゼントを受けると、とても喜んで、「このあめ玉をあげるから、3人でわけて食べなさい。」と言って、10このあめ玉をくれました。

例話3. 過失

夏子さんは、お母さんのお手伝いをして、お盆にガラスのコップを10このせて、部屋に運んでいました。ところが、部屋のドアをあけようとしたときに、手がすべって、お盆を落とし、コップは10こともみんな割れてしまいました。

例話4. 嘘言

秋子さんが、部屋の中でひとりであそんでいました。そこへお母さんがはいて来て、秋子さんにおつかいを言いつけました。でも、秋子さんは、出ていくのがいやなので「足が痛いから行けないの。」と、お母さんに言いました。でも、これは、本当ではなくて、足はちつとも痛くありませんでした。

例話5. 約束

冬子さんは、木登りがじょうずでした。ある日、木登りをしていて、低い木の枝から落ちてしまいましたが、けがはしませんでした。それを見ていたお父さんは、心配して「これからは木に登ってはいけませんよ。」と言って、冬子さんは、木登りをしないことを約束しました。ある日、予ねこが、高い木に登って降りて来れずに、木にし

がみついていた。助けないと、予ねこは死んでしまいます。

研究にあたり道徳性の内容をどうとりあげるかは人により異なるが、ここでは、従来なされた研究を参考に、以上の5つを選んだ。すなわち、例話1と2とは、共にDamonの研究を、例話3は良い意図のもとに起こった大きな過失の話で、二宮¹⁰⁾の作成したPiagetタイプの例話を参考にした。なお、各々の例話の主人公の性別は、調査対象の性別と同じになるようにした。また、本研究では、道徳感情・行動・判断の三側面より検討することを目的としているが、従来の研究では、その測定方法は多様であり、また、実際の危機的場面を設けることは困難であるため、今回は児童への質問により調査を行った。したがって、得られた結果が実際の行動に直接結びつくとは、もちろん言えない。しかし、以上の例話について、(1)主人公の感情、(2)主人公の予想される行動、(3)主人公の正しい行動あるいは主人公のしたことをどう思うか、(4)被験者の行動、の観点から、被験者の基本的な意識と行動の傾向に迫ろうとつとめた。なお、例話の性質上、例話2は(1)、(2)、例話5は(1)の質問を、検討の上、省いてある。

この調査並びに次の調査は、共に回答は、集団場面で、一つ一つ問題を読み聞かせながら自由記述させた。なお、幼稚園児については、ストーリーの内容を示している特定の場面の絵を見せながら面接調査を行っている（テープレコーダーに録音）。

得られた回答の整理にあたっては、全資料に目を通し、我々で合議の上、表2のような分類基準を作った。これらの分類基準がPiaget, KohlbergやSelman, Damonらの段階のどれに該当するかは必ずしも容易には断定できない。また、A, B, C…の基準のいずれがより道徳的に発達していると考えられるのかも検討の余地は多い。だが、本研究は将来の道徳性の発達基準の手がかりを得る意図から、ここでは見出された結果について、従来の研究結果を参考に考察を加えることにした。

また、小学校低学年は幼児の心性に近いと仮定し、幼稚園児と小学二年生とを一つの群（以下、幼群とする）とし、小学3, 5, 6年の群（以下、小群とする）と中学2, 3年生の群（以下、中群とする）とに分け整理した。なお、統計的处理は、以下すべてX²検定によっている。

2. 親の養育態度の調査

子供の道徳性の発達を促すと考えられる要因の中で、Maccobyら²¹⁾の指摘を参考に、特に効果を持つと考えられる次の13の要因についてたずねた。

表2 子どもの道徳性に関する調査の例話ごとの回答分類基準

例話1 権威と従順に関して		
(1) 主人公の感情	(2) 主人公の行動	(理由)
A. 片付ける、行かない B. 行きたい、遊びたい C. 困っている、迷っている D. その他	A. 片付け、行かない B. 片付けない、遊びに行 C. その他	a. 叱られる、ほめられる、お母さんが言った b. 遊びたい、すぐ行かないと入れてもらえない c. するべきことはちゃんとしないとけない d. 他の子と比べはよい、遊びはいつでもできる e. 片付けも遊びもしなければいけない f. その他
(3) 主人公の正しい行動——その理由	(2)と同じ分類基準	
(4) 被験者の行動——その理由		
例話2 正義(公平)に関して		
(1) 正しい分け方——その理由	(1) 主人公の感情	(2) 主人公の行動
A. 働きを考慮している B. 年令を考慮している C. 出きばえを考慮している D. 単純な平等 E. その他	A. どうしよう B. 叱られる C. 反省する(悪かった、あやまる他) D. しまったついでいない E. その他	A. あやまる、わけを言う B. 片付ける AB. あやまって片付ける C. 隠れる、逃げる D. その他
(2) 被験者の分け方——その理由	(3) 主人公のしたことをどう思うか——(理由)	a. 知ってしたのではない、お手伝いをしたから、失敗は誰にでもある。 b. コップを割ったから c. 叱られるから d. 不注意だから、持って行き方が悪い e. その他
(1)と同じ分類基準	A. 結果の方を重視している B. 意図の方を重視している C. かわいそう、大変なことをした D. あやまるべきことだ E. 不注意だ F. その他	
例話3 約束に関して		
(1) 主人公の行動	(4) 被験者の行動——(2)と同じ分類基準——(理由)	a. 仕方ない、知らないでした b. 自分が割ったのだから(責任を感じて) c. 叱られる、叱られないように d. 自分が悪いことをした e. 危いから f. 正直に言うべき、隠せるものではない g. その他
A. 助ける(約束を破って) B. 信頼を維持する(助けない、お父さんに行ってから) C. その他	a. 描に対する同情心(かわいそう、命は大切) b. 約束したから、叱られるから c. その他	
(2) 正しい行動	(理由)	
(1)と同じ分類基準		
(3) 被験者の行動——その理由		
(2)と同じ分類基準		
例話4 嘘言に関して		
(1) 主人公の感情	(4) 被験者の行動	(4) 1——(理由)
A. 成功したと思っている B. 悪い、後悔している C. ばれたらどうしよう D. 迷っている、葛藤している E. 行きたくない、遊びたい F. その他	(1) (嘘をついた場面が答えた場合) A. 本当のことを言いあやまる、反省 B. 嘘をつき続ける C. その他 (2) (お使いを頼まれた場面が答えた場合) A. 1 お使いへ行く A. 2 後から行く A. 3 はっきり断わる 嘘をつかない A. 4 逃げる A. 5 その他 B. 嘘をつく C. その他	a. 嘘をついたから b. 叱られるから c. ばれないように d. その他 (4) 2——(理由) a. 嘘はつかないから b. 行くべきことだから c. 叱られるから d. ほうびがもらえるから e. 行きたくない、面倒だから f. その他
(2) 主人公の行動	(3) 主人公のしたことをどう思うか——(理由)	
A. 本当のことを言いあやまる B. 嘘をつき続ける C. お使いに行く D. その他	A. 非難する(悪い、嘘をついた、行った方がよい) B. 成功した(うまくしました) C. その他	
(3) 主人公のしたことをどう思うか——(理由)	a. 嘘をついたから b. 行くべきなのに行かなかった c. ほうびがもらえる、ほめられる d. その他	

(しつけの方法) 1. 理由付け, 2. 誘導, 3. 愛情撤去, 4. 力の行使, 5. 報酬, 6. 罰, 7. 一貫したしつけ, 8. 意志決定, 9. 達成努力, (基本的親子関係) 10. 親から子への愛情, 11. 子から親への愛情, 12. 尊敬(権威), (同一視) 13類似性

以上の要因を、父親の場合と母親の場合とについてたずねた。父親をも対象にしたのは、特にその道徳性へのかかわりをみたかったからである。

この調査は、5段階の直線上に○印をつけさせた。但し、園児については、質問を説明してから3段階の大きさの異なる丸を選択させた。

親子関係は極めて複雑な人間関係であり、ここにとりあげた親の態度がそれぞれ独立して子どもに働くものではないが、ここでは各々の親の態度要因ごとに検討を行っている。なお、従来の研究から、理由付け・誘導・罰・一貫したしつけ・意志決定・達成努力などは、より多く用いる方が、また、愛情撤去・力の行使・報酬はあまり用いない方が好ましく、その逆は好ましくないと仮定した。回答の整理にあたっては、13項目の質問に対して、

好ましい方向に1～5点の得点を与え(幼児の場合は1～3点)、各学年・男女別に平均点を出し、これをもとに、得点がより高い群と低い群を選んだ。

なお、親の道徳性、親の認知する養育態度についても調査を行ったが、これについては、今後の検討としたい。また、今回の資料についてはその信頼度を算出することができなかったが、あわせて今後にまちなたい。

III. 調査期間・場所

幼稚園児については、園で面接により実施し、小・中学生は各クラス毎に教師が集団的に行った。

実施期間は昭和56年8月初旬から11月中旬の間である。

表3. 「権威と従順」についての回答の人数分布、有意な差、発達水準

質問内容	性別	低 群					中 群					高 群					有意な差	発達水準
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
(1)主人公の感情(権威)	A	7	4	11	8	11	19	2	2	4	17	19	36	+	+	+	+	+
	B	29	24	53	25	18	43	18	11	29	69	58	127	+	+	+	+	+
	C	7	5	12	15	22	37	18	15	33	30	36	66	+	+	+	+	+
	D	3	1	4	6	1	7	6	6	12	15	3	18	+	+	+	+	+
	無	4	2	6	1	1	2	—	—	1	1	2	3	—	—	—	—	—
(2)主人公の行動(権威)	A	32	28	60	34	40	74	29	15	44	39	36	75	+	+	+	+	+
	B	6	8	14	15	8	23	13	17	30	42	31	73	+	+	+	+	+
	C	2	1	3	2	1	3	1	—	1	3	2	5	+	+	+	+	+
	D	4	3	7	1	4	5	—	—	—	5	7	12	+	+	+	+	+
	無	15	11	26	15	18	33	8	5	13	38	34	72	+	+	+	+	+
(3)主人公の感情(従順)	A	8	8	16	6	9	15	18	13	31	30	30	60	+	+	+	+	+
	B	4	1	5	7	9	16	1	2	3	12	5	17	+	+	+	+	+
	C	1	—	1	2	2	4	—	—	—	3	2	5	+	+	+	+	+
	D	4	9	13	8	13	21	7	9	16	17	31	48	+	+	+	+	+
	無	14	19	33	16	7	23	4	2	6	36	22	58	+	+	+	+	+
(4)主人公の行動(従順)	A	30	34	64	45	40	85	37	34	71	120	118	238	+	+	+	+	+
	B	1	1	2	6	4	10	2	—	2	5	5	10	+	+	+	+	+
	C	1	1	2	1	2	3	1	1	2	4	8	12	+	+	+	+	+
	D	4	2	6	2	4	6	—	—	1	8	6	14	+	+	+	+	+
	無	18	11	29	21	23	44	19	12	31	56	46	102	+	+	+	+	+
(5)主人公の感情(権威)	A	1	2	3	4	9	13	—	—	2	8	10	18	+	+	+	+	+
	B	4	4	8	7	5	12	11	11	22	28	29	42	+	+	+	+	+
	C	0	2	2	2	4	6	2	2	4	7	8	15	+	+	+	+	+
	D	8	7	15	1	2	3	8	7	15	16	24	39	+	+	+	+	+
	無	12	12	24	17	19	36	1	3	4	30	28	58	+	+	+	+	+
(6)主人公の感情(従順)	A	55	55	110	61	76	137	28	21	49	168	168	336	+	+	+	+	+
	B	8	1	9	15	10	25	15	12	27	66	29	95	+	+	+	+	+
	C	—	2	2	2	—	2	2	4	4	5	9	14	+	+	+	+	+
	D	1	0	1	3	0	3	—	—	—	4	5	9	+	+	+	+	+
	無	18	18	36	12	15	27	8	3	11	85	81	166	+	+	+	+	+
(7)主人公の感情(権威)	A	1	8	9	15	10	25	17	12	29	37	22	59	+	+	+	+	+
	B	2	1	3	5	6	11	5	5	10	12	12	24	+	+	+	+	+
	C	3	1	4	2	5	7	2	1	3	7	5	12	+	+	+	+	+
	D	5	5	10	1	3	4	9	12	11	20	19	39	+	+	+	+	+
	無	11	3	14	1	5	6	4	5	9	7	12	19	+	+	+	+	+

結 果 と 考 察

1. 子供の道徳性について

各例話毎に、各々の質問について、男女差や発達差を中心に考察する。

1. 権威と従順の例話について

この回答の人数分布及び有意な差を示したもののについては表3に示ようになった。

(1)主人公の感情について

表3より、年少では、「行きたい、遊びたい」という自分の要求を卒直に示すが、一方で親の要求に従って「片付けて、遊びに行かない」と考えている。年長になるにつれて、自分の要求と権威者の要求の両方を考慮するようになるのか、「困っている、迷っている」という気持ちをより多く持つようである。

(2)主人公の行動について

表3からすれば、年少では「叱られるから、お母さんが言ったから」、「片付ける、行かない」というように権威に対して全く従順である。それが、年長であるほど、「遊びたいから」、「片付けない、遊びに行く」というよ

うに、自己の要求を通すことを考えるようになると言える。

(3)主人公のとるべき正しい行動について

表3には、年長になるにつれて、正しい行動は権威者に従うことだという傾向が多くあらわれている。その理由として、年長ほど、「するべき事はちゃんとすべきだ」という答えが多い。また、片付けも遊びもしなければいけないからという回答が小群でもっとも少なくなっている。①、②の傾向にそっているようであるが、なお検討の余地がありそうである。

(4)被験者の行動について

先の、主人公のとるべき正しい行動について聞いた場合には、中群で「片付ける、行かない」が多かったが、この被験者自身の行動については、逆に「片付けない、遊びに行く」が多く、その理由としては「遊びたい」が多い。これらは、正しい行動は観念的には理解しているが、実際の行動では自己の要求を通すという姿の反映とも考えられよう。一方、年少ほど、実際の行動で「片付ける、行かない」のは、正しい行動だからそうすべきだと理解しているわけではなく、「叱られるから」というように罰に対する従順からの行動であることがわかる。

以上の結果から権威と従順についてまとめると、まず、男女間では、男子に、「遊びたい」という気持ちが強く、女子では、片付けと遊びとの両方を考慮するようである。発達的には、年少児ほど権威に対して服従し、また、自己の感情が強く出されているが、とるべき正しい行動と自己の感情とを明確に区別していないことが判る。一方、年長児では、とるべき正しい行動は理解しているが、実際の行動では自己の要求と権威者の要求とを折衷させる方法を考え、感情的にも自己の要求と権威者の要求との間の葛藤に陥っている。これは、PiagetやDamonの結果とも一致する傾向である。

さて、上述の結果と考察から、本研究での道徳性の回答のどれがより発達しており、どれがより未発達なのか発達のレベルを仮定し、表3の右側に示してある。これによって親の態度とのかかわりを検討しようとしたためでもある。他の回答よりも発達した道徳性を表わすと考えられる回答には+、より未発達と考えられるものは-、ここではどちらも判断し兼ねるものには0の印をつけた。しかし、男女間や年齢群間の心性の違いによりその特徴は異なるため、全体・男子・女子・幼群・小群・中群に分けて、その基準を仮定したものである。なお、この基準については、将来さらに検討を続けていきたい。

2. 正義（公平）の例話について

(1)正しい分け方について

表4の傾向からすると、年長ほど、「働きの考慮」や「単純な平等」よりも「年令を考慮」することが多い。なお、全体の中で占める割合は少ないが「出きばえの考慮」が小群で少ないことについては、今後の検討にしたい。

表4. 「正義」についての回答の人数分布、有意な差、発達水準

質問内容	回答	幼 群		小 群		中 群		高 群		無差の回答	有意差のある回答		発達水準
		男	女	男	女	男	女	男	女		幼 群	小 群	
(1)正しい分け方	A	16	15	31	22	30	42	19	5	24	57	40	95
	B	6	6	12	5	10	15	12	14	26	20	30	53
	C	3	4	7	1	1	2	4	3	7	8	8	16
	D	17	12	29	24	22	46	16	14	34	51	46	95
	E	—	—	—	8	3	5	1	8	4	4	6	10
(2)働きの考慮の分け方	A	12	7	19	16	14	80	22	7	29	50	28	78
	B	6	9	15	8	12	20	18	18	31	27	29	66
	C	2	3	5	1	1	3	1	1	2	4	5	9
	D	24	17	41	28	23	47	9	12	21	57	58	100
	E	1	—	1	4	8	7	2	—	2	7	8	19

(2)被験者の分け方について

表4より、年少ほど、単純に人数割りでアメを分けるが、年長では、働きや年令を考慮して分ける者が多く、その傾向は女子でより大きいことがわかる。

以上の結果から正義についてまとめてみると、被験者の行動において、年少ほど、「単純な平等」の主張が多く、この段階から、働き・年令・出来ばえなどの「いくつかの異なる要求を考慮する」¹⁰⁾段階へと移行していると言える。これは、Damonの指摘と合致しているところである。また、正しい分け方についての回答でも類似した傾向があるが、実際の被験者に分け方について聞いた時よりも、「いくつかの異なる要求」を考慮する者の数が、年少児から、より多い傾向がある。これは、行動面と思考面での差異を示すものと考えられ、興味深い。なお、先にふれたように表4の後欄に判定基準を示してある。

3. 過失の例話について

(1)主人公の感情について

表5によると、年少ほど、結果にとらわれて「叱られる」と感じる者が多く、年長ほど、「悪かった、あやまる、お母さんに言う」というように先のことを考える答えが多くなっている。また、「しまった、ついてないな」という回答が中群で多いのは、良い意図でしたのに悪い結果になったことは、ついてないなという気持ちの動きとも考えられる。後述のような、年長ほど、意図を重視するという傾向と関連しているとも考えられよう。この傾向が女子より男子で大きいことは興味深い。

(2)主人公の行動について

表5では、全体に「あやまる」が多い。とりわけ、年少では、叱られるという意識が強いのか、「あやまる」が特に多く、年長ほど、「あやまって片付ける」というように、過失に対して責任をとる態度が強いことがわかる。また、「あやまって片付ける」という回答が男子より女子で多いのは、女子では、片付けをしなければならないということが男子よりも強く意識されている現われであるう。

表5. 「過失」についての回答の人数分布、有意な差、発達水準

質問内容	回答	幼 群		小 群		中 群		高 群		無差の回答	有意差のある回答		発達水準
		男	女	男	女	男	女	男	女		幼 群	小 群	
(1)主人公の感情	A	4	5	7	5	8	14	5	6	17	15	17	32
	B	21	19	40	19	37	10	11	21	49	40	30	79
	C	9	11	20	21	30	43	17	12	29	47	45	92
	D	5	2	5	7	1	8	4	12	18	7	25	43
	E	2	1	3	2	2	4	—	2	3	4	6	10
(2)主人公の行動	A	24	21	45	25	35	10	8	17	52	114	—	—
	B	18	10	28	13	15	25	11	5	16	28	54	—
	C	2	5	5	10	11	21	27	24	41	29	68	—
	D	1	1	2	1	1	2	1	1	5	2	5	—
	E	1	2	5	2	0	4	2	1	5	8	13	—
(3)主人公のしたこと	A	10	2	12	18	16	24	3	3	31	62	—	—
	B	14	—	14	29	24	30	26	58	78	50	126	—
	C	4	5	9	1	7	2	—	—	4	7	11	—
	D	9	8	17	4	4	8	—	2	2	13	14	—
	E	—	1	1	2	1	4	3	5	6	12	—	—
(4)教員(先生)の行動	A	4	4	8	2	3	5	—	1	4	8	14	—
	B	11	1	12	28	25	31	25	56	76	46	118	—
	C	11	10	21	11	15	26	8	6	3	25	81	—
	D	4	5	9	1	2	3	—	—	5	7	12	—
	E	—	3	3	7	10	5	—	5	8	10	18	—
(5)教員(先生)の感情	A	1	2	3	1	1	2	1	2	3	4	7	—
	B	17	17	34	11	8	19	—	4	4	20	20	—
	C	26	7	33	27	36	13	15	15	81	78	157	—
	D	6	5	11	3	7	4	—	4	13	7	20	—
	E	3	—	3	—	—	—	—	—	5	—	5	—
(6)教員(先生)の行動	A	3	—	3	—	—	—	—	—	5	—	5	—
	B	4	2	6	5	1	6	2	4	6	11	7	—
	C	2	1	3	2	1	3	—	—	4	2	6	—
	D	1	—	1	—	—	—	—	—	1	—	1	—
	E	7	4	11	8	11	12	16	21	30	31	61	—
(7)教員(先生)の感情	A	17	18	35	17	10	21	—	4	16	36	56	—
	B	2	1	4	7	5	12	8	4	10	10	25	—
	C	3	4	7	3	2	5	3	—	5	9	15	—
	D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	E	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(8)教員(先生)の行動	A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	B	13	11	24	15	18	31	7	5	12	30	42	—

(3)主人公のしたことをどう思うかについて

全体としては、年少では、結果重視、年長では、意図重視であるようだ。その理由については、aはBの、bはAの理由であり、やはり同じ特徴の現われである。年少者で、「叱られるから」という答えが多いのも同じ特徴の現われであろう。この傾向は従来の研究¹¹⁾¹⁰⁾と一致している。なお、男女間の違いもみられ、全体として男子に意図重視の傾向がある。これは、意図重視の方がより道徳的にレベルが高いとする従来の考え方からすれば、男子が女子よりも道徳的にレベルが高いということになるが、主人公の行動を批判した場合であることも考慮せねばなるまい。

(4)被験者の行動について

回答も、その理由についても同じ傾向である。すなわち、年少ほど、叱られるからあやまるというように結果重視であり、Kohlbergの言う「罰と服従志向」の段階の心性を示している。また、年長では、自分がコップを割り責任を感じたからあやまって片付けるのだというように、責任感が強くなっている。「逃げる」や「隠れる」で男子の方が女子より多いことは、一般的な男女間の性差らしきものの現われともみなすことはできまいが。

以上の結果から過失についてまとめると、4つの質問での回答には大きな差異はなかった。つまり、全体を通して、年少には、叱られるという意識が強い「罰と服従志向」であり、結果を重視している。そして、年長には責任を感じて、反省したり、あやまるという回答が多く、意図重視の傾向が大きくなっている。これらは、従来の研究¹²⁾と一致している。なお、従来の研究では、過失においては、意図重視か結果重視かという点のみを問題にしたものが多かったが、今回、その理由をとりあげると、「罰と服従志向」との関連や、責任感との関連が示唆されたことは有意義であったと思われる。また、表5の右側に判定基準を示してある。

4. 嘘言の例話について

(1)主人公の感情について

表6によると、女子に、「悪いと思っている」と罪悪感が強く、男子に「行きたくない、遊びたい」というように、自己の要求を主張する意識が大きいと考えられる。また、年長ほど、「成功したと思っている」という回答が多いのは、この例話の内容からすれば、親の権威と関係し、あるいは卒直な表現かもしれない。

(2)主人公の行動について

ここでの回答は、「嘘をつき続ける」、「本当のことを言う」が多い。先の主人公の感情では「悪いと思っている」が多かったが、それが単純に行動と結びついていてのではないようである。悪いと思っているが嘘をつき続ける、悪いと思い本当のことを言う、行きたくないから嘘をつき続ける、と様々な場合が考えられる。また、男子で「嘘をつき続ける」が多いのは、先の「行きたくない」という感情の、女子が「本当のことを言う」が多いのは、先の「悪いと思っている」という感情の、各々、現われということになろう。

(3)主人公のしたことをどう思うかについて

全体的に、主人公の行動を非難している者が圧倒的に多いが、年少と年長とを比べると、年長ほど、その傾向が大きいと言える。また、その理由で、年長は行くべきなのに行かなかったからという理由が多いことは、責任

表6. 「嘘言」についての回答の人数分布、有意な差、発達水準

質問項目	割合	幼 児		小 児		中 児		高 児		総合計		発 達 水 準						
		男 女		男 女		男 女		男 女				幼 児	小 児	中 児	その他			
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合									
(1)主人公の感情	A	44	38	32	55	105	40	36	76	139	127	264	男より女、幼・中・小・高より女	—	—	—	—	
	B	15	16	31	17	25	42	8	20	28	40	61		101	+	+	+	+
	C	3	2	5	3	1	4	1	2	5	7	12		10	0	0	0	0
	D	1	3	4	2	3	7	2	2	4	5	10		15	0	0	0	0
	E	17	7	24	19	9	28	17	7	24	58	20		76	+	+	+	+
	F	1	3	4	3	2	5	—	—	—	4	5		9	—	—	—	—
	無	4	4	8	4	3	7	—	—	—	8	7		15	—	—	—	—
(2)主人公の行動	A	10	10	20	17	19	66	4	11	15	81	40	71	男より女、幼・中・小・高より女、幼・中より男	0	0	0	0
	B	18	17	36	31	22	53	33	16	49	63	156	+		+	+	+	
	C	9	6	15	8	9	12	2	8	10	14	25	37		0	0	0	0
	D	4	2	6	1	2	3	—	—	1	5	5	10		—	—	—	—
	E	2	3	5	3	1	4	1	—	1	6	4	10		—	—	—	—
	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—
(3)主人公のしたことをどう思うか	A	37	29	60	49	48	97	38	32	70	124	109	233	幼・中・小	+	+	+	+
	B	1	—	1	2	—	2	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—
	C	4	5	9	1	3	4	2	4	6	7	12	19		—	—	—	—
	D	2	4	6	8	2	5	—	—	—	5	6	11		—	—	—	—
	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—
(4)理由	A	26	20	46	39	38	72	24	21	45	89	74	163	幼・中・小	+	+	+	+
	B	8	3	8	5	6	11	12	11	23	22	40	42		0	0	0	0
	C	1	1	2	—	2	—	—	—	1	3	8	—		—	—	—	
	D	5	2	7	—	5	5	2	3	5	7	19	17		—	—	—	—
	無	7	12	19	11	7	19	2	1	3	29	20	40		—	—	—	—
(5)男より女	A	5	7	12	12	15	27	2	2	4	19	24	45	男より女	+	+	+	+
	B	1	—	1	5	—	2	1	2	8	4	2	6		—	—	—	—
	C	—	—	—	—	1	1	—	—	—	1	1	3		—	—	—	—
	D	3	1	4	8	1	4	—	—	—	6	2	8		—	—	—	—
	無	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—	—
(6)発達水準	A	8	1	11	11	8	19	1	2	8	16	11	27	幼・中・小	+	+	+	+
	B	1	5	6	—	—	—	—	—	1	5	6	—		0	0	0	0
	C	—	—	—	—	—	—	—	2	2	1	2	3		0	0	0	0
	D	1	—	1	—	—	—	1	—	1	2	2	2		—	—	—	—
	無	—	—	1	1	3	7	10	1	1	4	8	12		—	—	—	—
(7)男より女、小・中	A	32	24	56	26	31	63	16	34	78	71	147	男より女、小・中より男、小・中・高より女	+	+	+	+	
	A ₂	1	2	8	1	—	1	2	3	5	4	5		9	0	0	0	0
	A ₃	1	1	2	6	4	10	10	8	18	17	33		30	0	0	0	0
	A ₄	—	—	—	—	1	1	—	—	—	1	1		2	0	0	0	0
	A ₅	1	1	2	3	—	3	5	3	8	9	4		15	0	0	0	0
	B	—	—	—	—	2	2	2	2	4	2	4		6	0	0	0	0
	C	—	3	2	—	—	—	—	—	—	2	2		3	—	—	—	—
(8)男より女、小・中・高	無	8	1	4	3	1	4	—	—	—	6	2	8	—	—	—	—	
	A	6	3	9	6	5	11	7	6	18	19	14	33	男より女、小・中・高より男、小・中・高より女	0	+	+	+
	B	8	9	14	9	9	18	10	11	21	24	23	55		+	+	+	+
	C	6	6	14	2	3	8	1	1	2	3	15	24		+	0	+	0
	D	12	2	4	3	3	8	—	—	—	5	5	10		0	0	0	0
	E	1	1	2	4	4	8	7	6	13	12	11	28		—	—	+	0
	F	4	1	5	4	4	8	6	4	10	14	9	23		0	0	0	0
無	11	6	17	9	6	15	6	4	10	16	16	42	—		—	—	—	

感の問題と関連するとも考えられ、先の過失の場合の結果と合わせて、興味深い点である。

(4)被験者の行動について

行動とその理由とを合わせて検討すると、年少では、「叱られないように」や（少数だが）「ほうびをもらう」ために「お使いへ行く」ということが多いが、年長では、お使いに行きたくなければ「はっきり断わる」という傾向がある。

以上の結果から、嘘言についてまとめてみる。まず、(3)の質問の結果では、嘘は悪いことだと理解している者が圧倒的にどの群でも多く、年長にその傾向が強い。この「嘘は悪いことだ」という理解が、主人公の感情において、「悪いと思っている」という気持ちとして現われているようだ。だが、これらの主人公に投影された理解や感情が主人公の行動にそのまま単純に反映されてはなら

ず、年少では、悪いことだから本当のことを言う、年長では、悪いことだから嘘をつき続けるというように違いが見られる。また、被験者の行動は主人公の行動とは異なっており、年少ほど、親のいいつけに従い、年長ほど、はっきり言って断わることが多くなる。従来の研究とは質問が異なるため、結果を直接比較することはできないが、感情面と行動面と認知面との間の差異は、今後の研究にとって示唆に富むものであるまいか。また、この例話では、他の例話においてよりも男女間に有意な差が多く得られた。これは、おつかいを場面とした例話の性質によるものとも考えられそうである。なお、上述の結果と考察から、表6後欄に仮定的な基準を設けた。

5. 約束の例話について

(1)主人公の行動について

表7より、全体的には、主人公は猫を助けると答える者が多いが、年長になるにつれ、その傾向は大きく、逆に年少であるほど、約束を忠実に守ることが多い。

(2)正しい行動について

行動とその理由について検討すると、年少では、「約束したから」、「叱られるから」、「信頼を保つ」行動をとるというように、権威者との葛藤を避け、服従志向が大きい。また、年長には、「同情心から」約束を破ってでも「助ける」というように、とるべき行動を正しく理解し、そのためには約束も時には破ってもよいものと考えていると言えよう。

(3)被験者の行動について

ここでの結果は、(2)での結果とほとんど同じであり、同様に解釈できる。

以上の結果から、約束についてまとめると、3つの質問での回答は、全てを通して同じ傾向であった。すなわち、約束というものは場合によっては破っても良いということをかかなりの者が認めているという点が大きく、理解も行動も一致している。また、年少であるほど、「約束したから」、「叱られるから」約束を守るというように、真の葛藤を経験しないことが多い傾向はSelmanの研究²⁾と一致する。以上の結果と考察から、表7の右欄に示すような判定基準の仮定をたてた。

これまで、子供の道徳性について各例話毎に進めてきた考察をここでまとめると、まず、権威と従順・正義・過失・約束では、従来の研究結果と一致するところが多く、道徳性の発達にほぼ予想される傾向がみられたと言えそうである。しかし、嘘言については、従来の研究と比較できる回答内容ではなく、さらに検討を必要としよう。なお、本研究でとりあげた5つの領域での道徳性は、各々、さらに吟味すべき多くの問題を持っており、また、

表7. 「約束」についての回答の人数分布、有意な差、発達水準

質問	回答	幼 群			小 群			中 群			総 合 計			有意差のある関係	発達水準
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
(1)主人公の行動	A	32	25	57	47	48	95	36	36	72	115	110	225	幼<小, 幼<中	+
	B	8	11	19	6	3	9	3	—	3	17	14	31	幼>小, 幼>中	+
	C	2	—	2	—	2	1	—	1	5	—	5	—	—	—
	無	2	2	4	—	1	1	—	—	2	3	5	—	—	—
	無	2	2	4	—	1	1	—	—	2	3	5	—	—	—
(2)主人公の正しい行動理由	A	16	15	31	41	41	82	32	32	64	89	88	177	幼<小, 幼<中	+
	B	21	18	39	10	11	21	8	3	11	89	82	171	幼>小, 幼>中	+
	C	2	1	3	2	—	2	—	1	1	4	2	6	—	—
	無	5	4	9	2	1	3	—	—	7	5	12	—	—	—
	無	5	4	9	2	1	3	—	—	7	5	12	—	—	—
(3)被験者の行動(理由)	A	20	14	34	37	32	69	38	39	77	90	76	166	幼<小, 幼<中, 幼<中	+
	B	11	11	22	6	5	11	5	2	7	22	18	40	幼>小, 幼>中	+
	C	2	2	4	3	5	8	1	5	6	6	10	16	—	—
	無	11	11	22	3	11	20	1	1	2	21	23	44	—	—
	無	11	11	22	3	11	20	1	1	2	21	23	44	—	—
(4)被験者の行動(理由)	A	27	15	42	43	45	88	35	34	69	105	94	199	幼<小, 幼<中, 幼<中	+
	B	14	18	32	8	7	15	3	2	5	25	27	52	幼>小, 幼>中	+
	C	1	4	5	1	—	1	2	—	2	4	4	8	—	—
	無	2	1	3	3	1	4	—	—	5	2	7	—	—	—
	無	2	1	3	3	1	4	—	—	5	2	7	—	—	—
(5)被験者の行動(理由)	A	24	16	40	40	34	74	33	33	66	97	83	180	幼<小, 幼<中, 幼<中	+
	B	5	9	14	2	2	4	2	1	3	12	12	24	幼>小, 幼>中	+
	C	5	7	12	2	5	7	3	1	4	10	8	18	—	—
	無	7	11	18	13	12	25	2	3	5	20	24	44	—	—
	無	7	11	18	13	12	25	2	3	5	20	24	44	—	—

各領域内での質問の関連性についてもより深く分析すべきであったが、今後の研究の課題とせねばならない。

II. 子どもの道徳性と親の養育態度との関連について

関連を検討するのに先立って、親の養育態度についての回答結果の概略を述べておくことにする。(養育態度の人数分布表は省略した)ただ、はじめにふれたように、養育態度得点から、それぞれ高低二群に分けて整理を行ったから、人数分布のおよそ傾向についてふれたい。

まず、母親の養育では、中群の母は幼群や小群の母より理由付けをより多く、幼群の母は中群の母より愛情撤去をより多く、また、小群の母は幼群の母より力の行使をより多く用いている傾向が認められるが、これは、子供の年齢に応じて、ごく普通にとられる取り扱い傾向と言えそうである。また、愛情撤去は、男子は女子よりも多く用いられる傾向がみられ、特に、小群の男女間にそれが顕著であり、一貫したしつけは、幼群では男子は女子よりも多く用いられ、逆に、中群では女子が男子よりも多く用いられているようである。さらに、意志決定では、女子は男子よりも多く参加させられ、特に、中群の男女間にその傾向がある。達成努力は、男子より女子に多く認められ、それも、小群の男女間により明らかな傾向が認められた。子から母への愛情については、女子は男子よりも強く愛情を寄せ、特に、幼群の男女間にその傾向がある。また、幼群や小群は中群よりも強く母への愛情を寄せているようであり、女子は男子よりも母親に類似していると思っており、特に、中群の男女間にその傾向が認められる。また、中群は幼群や小群よりも母親に類似していると思っている傾向がうかがえる。ちなみに、これらの傾向には、我々の先の研究¹¹⁾に一致するとこ

るも少なくない。

次に、父親については、罰は男子は女子よりも、中群は小群よりも多く用いられているようである。また、一貫したしつけは、中群は幼群や小群よりも多くうけている傾向があり、意志決定は男子は女子よりも多く参加させられ、達成努力は小群、中群が幼群よりも促されている傾向がうかがえる。結論として、以上の見出された傾向は、子どもの年齢、性別を考慮するとごく一般的な態度とり扱いの傾向がみられ、また、母と同じように父の場合も、子どもの年齢に応じて適切なとり扱いをしているとも言えそうである。

次に、親の養育態度と子の道徳性の関連を知るため、養育態度の13項目についてとり出した各々の高低二群において、道徳性の調査の回答の人数分布を求め、 χ^2 検定を行った。紙面の都合上、危険率10%水準で有意な関連のあったもののみをとりあげ、表8～14にまとめた。どの表についても、左側が道徳性の発達を促すと考えられる養育行動、右側が促さない行動を示し、また、+、-、0印は先に道徳性の判定基準として仮定した符号を意味している。道徳性のすべての回答内容については有意な関連は認められず、むしろその数は少なく、学年、男女別で結果も異なり、さらに、予想された積極的関連のみが見られたとは言えないが、以下その傾向について若干

の考察を加え、将来を期したいと考える。

1. 理由付け(表8)

母親の場合には、理由付けと道徳性との間には、理由付けの多い場合に道徳性のより高いものが、また、あまり用いない場合に低いものが相対的に多い傾向がうかがえる。しかし、父親では、理由付けをあまり用いないことが発達した道徳性と関連しており、予想とは逆の結果が見出されたが、その理由については明らかでない。さらに、検討を必要とする。

2. 誘導(表9)

母親では、ほとんどの場合に、誘導を多く用いることと発達した道徳性、あまり用いないことと未発達の道徳性とは関連しており、従来の研究からの仮定とほぼ一致していよう。しかし、過失での主人公の感情と、約束での被験者の行動とにおいて、誘導を多く用いることと叱られると感じる傾向が関連している。この点については、誘導的なしつけが子どもの情緒に働きかけているとも考えられるかもしれない。次に、父親では、権威と従順・正義・過失において、全体として、母と同じく誘導的なしつけの道徳性への効果がある。但し、嘘言ではその逆の関連がみられることに注意しなければなるまい。

表8. 理由付けと各例話の回答との関連

		理由付けを多く用いる場合		あまり用いない場合	
		回 答 内 容	回 文	回 答 内 容	回 文
		回 答 内 容	回 文	回 答 内 容	回 文
I. 権威と従順	(1)	A. 片付けろ。行かない(小群)	+	B. 行きたい。遊びたい(男子)	-
	(2)	a. 叱られるから(小群)	+	A. 片付けろ(小群)	+
				u. 叱られるから(全体)	+
				A. = (女子)	+
				a. = (幼群)	+
	(3)	A. 片付けろ。行かない(女子)	+	B. 行きたい(女子)	-
				B. = (小群)	-
				a. 叱られるから(全体)	+
				b. 遊びたいから(女子)	+
				D. 連絡を平等(幼群)	-
II. 正義	(1)	B. 年寄を考慮(全体)	+		-
	(2)	B. 年寄を考慮(女子)	+		-
		D. 連絡を平等(幼群)	+		-
	(3)	B. 叱られる(女子)	-	A. 叱られる(全体)	0
	(2)	A.B. あやまって片付けろ(全体)	0		
		A.B. = (女子)	0		
	(3)	A. 結果を重視(幼群)	-		
	(4)	A.B. あやまって片付けろ(全体)	0	A. あやまる(全体)	+
		A.B. = (女子)	0	A. = (女子)	+
		f. 正義感言うべき(小群)	0	A. = (小群)	+
III. 過失	(1)			C. 叱られるから(女子)	+
	(2)	C. お使いに行く(女子)	0		
		C. = (全体)	0		
	(3)	h. 行くべきだが行かなかった(全体)	0		
	(4)			A. 本当のことを言う(男子)	+
				A.g. はっきり言って断れる(中群)	0
				B. 遊びたいから(全体)	0
				B. 信頼を促す	-
	(2)	A. 助けろ(女子)	+		
	(3)			A. 助けろ(全体)	+
IV. 約束	(1)	A. 助けろ(女子)	+	A. = (女子)	+
				A. = (小群)	+
				a. 助けろから(全体)	+
	(2)	A. 助けろ(小群)	+	A. = (小群)	+
				a. 助けろから(全体)	+
	(3)	A. 助けろ(小群)	+	A. = (小群)	+
				a. 助けろから(全体)	+
	(4)	A. 助けろ(小群)	+	A. = (小群)	+
				a. 助けろから(全体)	+
	(5)	A. 助けろ(小群)	+	A. = (小群)	+

表9. 誘導と各例話の回答との関連

		誘導を多く用いる場合		あまり用いない場合	
		回 答 内 容	回 文	回 答 内 容	回 文
		回 答 内 容	回 文	回 答 内 容	回 文
I. 権威と従順	(1)	A. 片付けろ。行かない(中群)	+	B. 行きたい。遊びたい(中群)	-
		b. 遊びたいから(小群)	-		
		b. = (全体)	+		
		b. = (男子)	+		
		e. 片付けろ遊びも(全体)	+		
		e. = (中群)	-		
	(2)	c. すぐべきこととはする(中群)	+		
	(3)	c. = (中群)	0		
	(4)	A. 働きを考慮(小群)	+	D. 連絡を平等(全体)	-
		B. 年寄を考慮(男子)	+	D. = (男子)	-
II. 正義	(1)	B. = (全体)	+	D. = (女子)	-
		C. 出さばえを考慮(中群)	0	D. = (小群)	-
	(2)	A. 働きを考慮(小群)	+	D. = (全体)	-
		B. 年寄を考慮(全体)	+	D. = (男子)	-
		B. = (男子)	+	D. = (小群)	-
		B. = (小群)	+		
	(3)	B. 叱られる(全体)	-	C. 反省する(女子)	+
		B. = (女子)	-	C. = (小群)	+
		B. = (小群)	-		
		B. = (中群)	-		
III. 過失	(1)	B. 遊びを重視(小群)	+	A. 結果を重視(小群)	-
		B. = (中群)	+	b. コップを割ったから(全体)	-
		a. 知ってしまったのではない(男子)	+	b. = (男子)	-
		a. = (小群)	+	b. = (小群)	-
	(2)	A. あやまる(中群)	0	A.B. あやまって片付けろ(中群)	+
		f. 正面に言うべきだ(全体)	0		
		f. = (女子)	0		
		f. = (小群)	0		
	(3)	E. 行きたい(男子)	+	A. 成功したと思っている(全体)	-
				A. = (男子)	-
IV. 約束	(1)	C. お使いに行く(女子)	0		
		C. = (小群)	0		
	(2)	b. 行くべきだが行かなかった(男子)	0	A. 謝罪しているもの(全体)	+
		b. = (小群)	0	A. = (男子)	+
	(3)	a. 謝罪したから(全体)	+	A. = (幼群)	+
		a. = (女子)	+		
	(4)	b. 行くべきだから(全体)	+	A.g. お使いに行く(全体)	+
		b. = (男子)	+	A.g. = (小群)	+
	(5)	A. 助けろ(小群)	+	a. 同様のから	+
		a. 同様のから(小群)	+		
V. 約束	(1)	A. 助けろ(小群)	+		
		A. = (小群)	+		
	(2)	A. 助けろ(小群)	+		
		A. = (小群)	+		
	(3)	A. 助けろ(小群)	+		
		A. = (小群)	+		
	(4)	A. 助けろ(小群)	+		
		A. = (小群)	+		
	(5)	A. 助けろ(小群)	+		
		A. = (小群)	+		

3. 愛情撤去 (表10)

まず、母親では、およそ愛情撤去をあまり用いないことと発達した道徳性に関連しているようであり、予想と一致した結果と言えよう。しかし、父親では一貫した関連は見られず、むしろ、逆の傾向すらうかがえそうである。

表 10. 愛情撤去と各例話の回答との関連

		愛情撤去をあまり用いない場合		多く用いる場合	
		回 答 内 容	母 父	回 答 内 容	母 父
I 模 範 と 従 順	(1)	B. 泣きたい(中群)	+	c. 困っている(中群)	+
	(2)	B. 片付けたい(幼群)	-	A. 片付ける(幼群)	+
				a. 叱られるから(全体)	+
II 正 義	(3)	A. 片付ける、行かさい(中群)	+	e. 片付けも遊びも(小群)	0
	(4)	D. 卑屈な平等(全体)	-	B. 年令を考慮(全体)	+
		D. 〃 (男子)	-		
III 通 達	(5)	D. 〃 (全体)	-	A. 働きを考慮(男子)	+
		D. 〃 (男子)	-	A. 〃 (幼群)	+
		D. 〃 (女子)	-		
IV 決 断	(6)	C. 反省する(中群)	+	A. どうしよう(中群)	0
				B. 叱られる(幼群)	+
				D. しまった、ついでない(中群)	0
V 希 求	(7)	B. 片付ける(全体)	0	A. あやまる(全体)	0
		B. 〃 (男子)	0	A. 〃 (男子)	0
		AB. あやまって片付ける(全体)	0	A. 〃 (幼群)	+
VI 懲 罰	(8)	B. 懲罰を要する(全体)	+	A. 結果を要する(全体)	-
		B. 〃 (女子)	+	A. 〃 (男子)	-
		a. 知ってしまったのではない(全体)	+	C. かわいそう(女子)	0
VII 自 律	(9)	a. 〃 (女子)	+	E. 不注意が(全体)	0
		a. 〃 (中群)	+	E. 〃 (男子)	0
		AB. あやまって片付ける(女子)	0	B. 〃 (幼群)	0
VIII 自 尊	(10)			C. ばれたらどうしよう(全体)	0
		B. 謝意を表現(全体)	+		
		B. 〃 (男子)	+		
IX 道 徳	(11)	C. お使いに行く(男子)	0		
		A. 両方の子を言う(全体)	+		
		A. 〃 (男子)	+		
X 自 尊	(12)	A. お使いに行く(幼群)	+	e. 微動大から(全体)	0
		B. 行くべき光栄(全体)	+		
		B. 〃 (男子)	+		
XI 自 尊	(13)	C. 叱られるから(幼群)	+		
		A. 助ける(小群)	+		
		B. 信頼を保つ(幼群)	-		
XII 自 尊	(14)	B. 〃 (全体)	-		
		B. 謝罪したから(幼群)	-		

4. 力の行使 (表は省略)

一定の傾向の認められないものについては、以下、表は省略したが、力の行使と道徳性との間には、母親の場合、父親の場合共に、明確な関連は認められないようである。従来の研究⁴⁾からも、力の行使の効果は単純なものではないことが示唆されているが、力の行使には、特に親の愛情の有無がその効果を強く規定することを考えると、さらにこれらの親の態度を結びつけて検討する必要があると思われる。

5. 報酬、6. 罰 (表は省略)

母親、父親共に、報酬や罰を用いること、用いないことの両方が、発達した道徳性にも関連している傾向がみられる。報酬・罰共に、他の要因にその効果は影響されるという研究は多く、ここで必ずしも一貫した結果を得られなかったことも、そのためかもしれない。今回の結果から考えれば、強化を問題にする場合には測定方

法から検討し直す必要があると言えよう。

7. 一貫したしつけ (表は省略)

母親、父親共に、一貫したしつけと道徳性との関連には明確な傾向は見出せない。殊に、正義や約束では予想とは逆の傾向さえある。一貫したしつけと言っても、そのしつけの内容により効果が異なるのであろうか、検討せねばならない点である。

8. 意志決定 (表は省略)

母親の場合には、意志決定と道徳性との間には一貫した関連は見られない。一方、父親についても同じであり、有意な関連の数も少ないため判断はできない。

9. 達成努力 (表は省略)

まず、母親では、明確な関連は見出せない。次に、父親では、達成努力を促すことと未発達な道徳性、促さないことと発達した道徳性との関連もあるようだが、有意な差の数も少ないため、結論できない。この結果は、意志決定、達成努力共に、道徳性の発達にはより間接的に影響すると考えられる要因であるためであろうか、検討の余地がある。

10. 親から子への愛情 (表11)

まず、母親については、母親からの愛情を強く感じていることと発達した道徳性、あまり感じていないことと未発達な道徳性との関連がある。これは、従来の研究からの予想¹²⁾と合致する。次に、父親の場合も母親と同じような結果であるが、有意な差の数が少ないので、はっきりと結論することはできない。

表 11. 親から子への愛情と各例話の回答との関連

		親の愛情を強く感じている場合		あまり感じていない場合	
		回 答 内 容	母 父	回 答 内 容	母 父
I 模 範 と 従 順	(1)	a. 片付けも遊びも(幼群)	+	C. するべきことはする(全体)	0
	(2)	a. 叱られるから(全体)	+		
		a. 〃 (男子)	+		
II 正 義	(3)	a. 〃 (幼群)	+		
		C. するべきことはする(小群)	0		
III 通 達	(4)	A. 片付ける、行かさい(全体)	+	B. 片付けたい(全体)	-
		A. 〃 (男子)	+	B. 〃 (男子)	-
		a. 叱られるから(女子)	+	B. 〃 (中群)	-
IV 決 断	(5)	e. 片付けも遊びも(小群)	0		
		e. 〃 (男子)	0		
		e. 〃 (女子)	0		
V 希 求	(6)	e. 〃 (小群)	0		
		e. 〃 (中群)	0		
		e. 遊びはいつでもできる(全体)	0		
VI 懲 罰	(7)	e. 〃 (男子)	0		
VII 自 律	(8)	A. 働きを考慮(小群)	+	D. 卑屈な平等(小群)	-
		A. 〃 (小群)	+	C. 出きばえを考慮(幼群)	0
				D. 卑屈な平等(小群)	-
VIII 自 尊	(9)	AB. あやまって片付ける(幼群)	0		
		B. 懲罰を要する(小群)	+	A. 結果を要する(小群)	-
		a. 知ってしまったのではない(小群)	+		
IX 道 徳	(10)	B. コップを割ったから(幼群)	+		
		AB. あやまって片付ける(男子)	0		
		C. ばれたらから(中群)	-		
X 自 尊	(11)	A. 成功したと思っている(全体)	-	B. 悪いと思っている(幼群)	+
		A. 本当のことを言う(女子)	0		
		A. 〃 (小群)	+		
XI 自 尊	(12)	A. 非難しているもの(全体)	+		
		A. 〃 (小群)	+		
		A. 本当のことを言う(全体)	+		
XII 自 尊	(13)	A. 〃 (女子)	+		
		A. 〃 (中群)	+		
		C. 叱られるから(幼群)	+		
XIII 自 尊	(14)	A. お使いに行く(全体)	+	Aa. はっきり言って断わる(全体)	0
		A. 〃 (女子)	+		
		A. 〃 (男子)	+		
XIV 自 尊	(15)	A. 助ける(女子)	+	B. 信頼を保つ(女子)	-
		A. 〃 (小群)	+	B. 〃 (小群)	-

11. 子から親への愛情 (表12)

母親への愛情、父親への愛情共に (若干の例外はあるが)、強く愛情を感じていることと発達した道徳性、あまり感じていないことと未発達の道徳性との関連があり、従来の研究からの予想に合致している。

12. 尊敬 (表13)

母親、父親の場合共に、尊敬していることと発達した道徳性との関連がある。しかし、あまり尊敬していない場合の道徳性との関連の傾向が明白でないため、簡単に結論してはならないであろう。

13. 類似性 (表14)

まず、母親については、母親との類似性の認知がより大きい方が発達した道徳性と関連し、より小さい方が未発達の道徳性と関連している傾向が全体として認められる。また、父親も母親と同様の期待通りの傾向があるが、有意な差の数が少ないため、断定はさしひかえない。

以上、子の認知した親の養育と子の道徳性との関連について検討してきた。その結果、母親については意味あ

表12. 子から親への愛情と各例話の回答との関連

		親に強く愛情をよせている場合		あまりよめていない場合	
		回 答 内 容	母 父	回 答 内 容	母 父
I. 他 親 と 近 似	(1)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 行きたくない(女子) B. 〃 〃 (幼男)	— — +	C. 困っている(全体) D. 〃 (女子) C. 〃 (幼男) C. 〃 (中男)	— — — +
	(2)	A. 片付ける。行かない(幼男) a. 叱られるから(全体)	— +	B. 片付けてない(女子) B. 〃 (幼男) b. 遊びたいから(女子) b. 〃 (幼男)	— — — +
	(3)	A. 片付ける。行かない(男子) c. するべきことはする(小男)	— +	A. 片付ける。行かない(中男)	+
	(4)	A. 片付ける。行かない(全体) A. 〃 〃 (男子) A. 〃 〃 (女子) A. 〃 〃 (幼男) A. 〃 〃 (小男) A. 〃 〃 (中男) a. 叱られるから(全体) a. 〃 (女子) a. 〃 (幼男) a. 〃 (小男) c. するべきことはする(中男) c. 遊びたい(男子)	— —		

表13. 尊敬と各例話の回答との関連

		親を尊敬している場合		あまり尊敬していない場合	
		回 答 内 容	母 父	回 答 内 容	母 父
I. 他 親 と の 近 似	(1)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 叱られるから(女子) C. 遊びたいから(男子)	+	E. 片付けも遊びも(全体) F. 〃 (幼男)	0
	(2)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 叱られるから(幼男) B. 遊びたいから(全体) C. 遊びたいから(女子) D. 〃 (女子)	0
	(3)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0
	(4)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0
	(5)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0
	(6)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0
	(7)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0
	(8)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0
	(9)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0
	(10)	A. 片付ける。行かない(全体) B. 〃 (男子) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 叱られるから(幼男)	+	A. 片付ける。行かない(幼男) B. 〃 (幼男) C. 〃 (幼男) D. 〃 (幼男) E. 〃 (幼男)	0

る幾つかの関連傾向が見出されたが、父親については、誘導と愛情 (子→父) に関してのみ関連がみられ、愛情 (父→子)、尊敬、類似性では、関連がありそうだが断言できないという結果であった。これは、父親は子どもの道徳発達に重要な影響を及ぼすという我々の考え方にとっては、やや否定的な結果であった。だが、日常生活においては父親の役割はより直接的でなく、すなわち、母親との関係や母親の養育態度への影響を通して子どもの道徳発達に関わり、潜在的な効果を持つ¹³⁾可能性も忘れてはならないだろう。

また、道徳性の発達を促す傾向が見られたものは、愛情 (親→子)、愛情 (子→親)、尊敬という基本的親子関係と、類似性すなわち同一視と、誘導、愛情撤去という、従来から関連あると言われている要因であったことは、今後の研究を進めていく上で示唆された点である。ただ、理由付けについては、さらに検討せねばならない。

最後に、例話のうちの約束について得られた関連は、ほとんどが他の4つの例話とは逆の傾向であったことに留意せねばならない。これには例話の内容の差異が関連

表14. 類似性と各例話の回答との関連

		類似性を強く認知している場合		強く認知していない場合	
		問 答 内 容	母 父	問 答 内 容	母 父
1. 権威と従順	(1)			A. 片付ける。行かぬ(小児)	+
	(2)	A. 片付ける。行かぬ(中児)	+	B. 片付けてない(中児)	-
	(3)			C. 片付けも遊びも(小児)	+
	(4)			D. 片付けも遊びも(全体)	+
2. 正義	(1)			E. 片付けも遊びも(中児)	+
	(2)	A. 遊びを考慮(小児)	+	F. 片付けを考慮(中児)	+
	(3)	B. 座席を考慮(全体)	+	G. 座席を考慮(小児)	+
	(4)	C. 単純な平等(中児)	+	H. 単純な平等(小児)	+
3. 約束	(1)	A. 約束を考慮(中児)	+	I. 約束を考慮(中児)	+
	(2)	B. 約束を考慮(小児)	+	J. 約束を考慮(中児)	+
	(3)	C. 約束を考慮(小児)	+	K. 約束を考慮(中児)	+
	(4)	D. 約束を考慮(小児)	+	L. 約束を考慮(中児)	+
4. 愛情	(1)	A. 愛情を考慮(中児)	+	M. 愛情を考慮(中児)	+
	(2)	B. 愛情を考慮(小児)	+	N. 愛情を考慮(中児)	+
	(3)	C. 愛情を考慮(小児)	+	O. 愛情を考慮(中児)	+
	(4)	D. 愛情を考慮(小児)	+	P. 愛情を考慮(中児)	+
5. 道徳性	(1)	A. 道徳性を考慮(全体)	+	Q. 道徳性を考慮(全体)	+
	(2)	B. 道徳性を考慮(小児)	+	R. 道徳性を考慮(小児)	+
	(3)	C. 道徳性を考慮(小児)	+	S. 道徳性を考慮(小児)	+
	(4)	D. 道徳性を考慮(小児)	+	T. 道徳性を考慮(小児)	+
6. 道徳性	(1)	A. 道徳性を考慮(小児)	+	U. 道徳性を考慮(小児)	+
	(2)	B. 道徳性を考慮(小児)	+	V. 道徳性を考慮(小児)	+
	(3)	C. 道徳性を考慮(小児)	+	W. 道徳性を考慮(小児)	+
	(4)	D. 道徳性を考慮(小児)	+	X. 道徳性を考慮(小児)	+
7. 道徳性	(1)	A. 道徳性を考慮(小児)	+	Y. 道徳性を考慮(小児)	+
	(2)	B. 道徳性を考慮(小児)	+	Z. 道徳性を考慮(小児)	+
	(3)	C. 道徳性を考慮(小児)	+	AA. 道徳性を考慮(小児)	+
	(4)	D. 道徳性を考慮(小児)	+	AB. 道徳性を考慮(小児)	+

していることも考えられ、今後の検討を要する。さらに、各例話・各質問毎に詳細に検討せねばならないが、これは今後の課題としてゆきたい。

要 約

児童の道徳性の特性について、感情・行動・理解の面から発達的に明らかにし、合わせて、父母の養育との関係についても検討することを目的として、幼稚園児から中学生までを対象に、面接または質問紙調査を行った。その結果を分析し、次のことを見出した。

1. 子供の道徳性について

(1)権威と従順

年少ほど、権威に服従し、自己の要求も強く出す。年長ほど、正しい行動について理解しており、実際の行動では自己の要求と権威者の要求との葛藤に陥る。

(2)正義

年少ほど、単純な平等を主張し、年長ほど、幾つかの異なる要求を考慮する。正しい行動についての理解の方が実際の行動よりも進んでいる。

(3)過失

年少では、結果重視し、年長には責任感があり、意図重視する傾向がある。

(4)嘘言

嘘は悪いことだという理解はどの年令でも多いが、行動の方では、年長ほど、はっきり言って断わることが多く、年少ほど、親のいいつけに従うものが多い。

(5)約束

年少では、約束の遂行について葛藤を経験せず、年長には、約束は時には破ってもよいという者が多い。

2. 子どもの道徳性と親の養育態度との関連について

まず、母親、父親共に、誘導を多く用いることと発達した道徳性、あまり用いないことと未発達した道徳性との関連がありそうである。また、母では、愛情撤去をあまり用いないことと発達した道徳性、よく用いることと未発達した道徳性との関連の傾向があった。次に親からの愛情や親への愛情を強く感じていることや尊敬していることや強い類似性の認知と発達した道徳性、それらの逆と未発達した道徳性と関連が、父母両方であった。以上、従来の研究からの予想と一致する結果を得た。他の要因では一貫した関連性が見出せなかった。

文 献

- 1) Piaget, J.: Le Jugement moral chez l'enfant, 1930, 大伴茂訳: 児童道徳判断の発達, 同文書院, p. 574 (1957)
- 2) Maccoby, E. E.: Social Development, Harcourt Brace Jovanovich, p. 436 (1980) より
- 3) Damon, W.: The Social World of The Child, Jessey-Bass, p. 361 (1977)
- 4) Hoffman, M. L. & Saltzstein, H. D.: Parent discipline and the child's moral development, J. perso. soc. Psychol., 5-1, 45-57 (1967)
- 5) Shaffer, D. R. & Brody, G. H.: Parental and Peer Influences on Moral Development, In Henderson, R. W. ed., Parent-Child Interaction, Academic Press, 83-124 (1981)
- 6) 倉貫美紀: 児童の道徳性判断についての研究, 教心研, 16-2, 100-110 (1968)
- 7) 久世敏男, 丸井文男: 児童の社会的行動に関する縦断的研究, 名古屋大学教育学部紀要, 23, 207-218 (1976)
- 8) Greif, E. B.: Fathers, Children, and moral Development, In Lamb, M. E. ed., The Role of The Father in Child Development, John-Wiley & Sons, 219-236 (1976)
- 9) Lynn, D. B.: The Father, Wadsworth Publishing

- (1978), 今泉信人他共訳, 父親, 北大路書房, p. 450 (1981)
- 10) 二宮克美: 児童の道徳的判断に関する研究, 教心研, 28-1 (1980)
- 11) 小西勝一郎・粕井みづほ・三谷英津子: 親への同一視についての発達の研究, 本紀要, 27, 225-235 (1979)
- 12) Martin, B.: Parent-Child Relations. In Horowitz, F. D. ed., Review of child development research, vol. 4, University of Chicago Press, 463-540 (1975)
- 13) Hoffman, M. L.: Development of moral Thought, Feeling, and Behavior, American Psychologist, 34-10 (1980), 依田明他訳, 道徳性の発達, 依田明監訳, 現代児童心理学 4, 情緒と対人関係の発達, 89-117 (1981)

(昭和57年11月9日受理)

Summary

The purpose of this study was to examine the moral development in children and its relationship with parental discipline. Data were collected from 139 boys and 127 girls of a Kindergarten, a primary school and a junior high school, by questionnaire. The questionnaire consisted of 5 stories on obedience, mistake, lie, promise and justice, and 13 items on affection, induction, power assertion, love withdrawal and others of discipline and parental identification.

The results were as followed :

1. There were the developmental changes with age in children's moral thinking on 4 stories but a lie story, roughly corresponding with results of other studies (Piaget, Kohlberg, Damon etc.).
2. It seemed that maternal discipline on induction, affection and parental identification related more with children's morality positively but love withdrawal negatively than paternal discipline.